

## 唐突な帰郷命令

牧師 山本 護



どかっと雪が降った春分の日、芽を出しはじめていた草花がなんだか啞然としているようでした。私も啞然とし、「春の雪めざめにちょうどよき狂い」と駄句のつぶやき。

春分の雪程度の小さなアクシデントならば、ぼんやりした頭の刺激になるでしょうし、固くなりがちな私たちのパターンを按摩してくれる「ゆらぎ」になるかもしれません。いや待てよ、水仙は冬の季語ではな

かったか。だとすれば、この花にとって雪は、唐突な帰郷命令になるんじゃないか、とおおげさな妄想を巡らせました。

雪が降った同じ日にI氏が召されました。氏は私よりふたまわりほど年長の詩人。かつて氏の自作詩朗読のための音楽を作ったことがあって、その際に幾冊もの詩集を丁寧に読み込みました。I氏は、大学で英文学を講じながら訳詩も数多いのですが＝土俗的な風土で育った少年時代、戦後横須賀での混沌とした青年時代＝洗練と土俗性と猥雑さが安易に溶け合うことなく、斑状に混在しているところが詩の特徴でしょうか。

「この人たちは皆、信仰を抱いて死んだ。約束されたものを手に入れなかったが、はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表した(ヘブライ 11:13)」。たとえ「よそ者」であっても、地上に長く住むあいだにはそれなりの根が張り、引き抜かれる時には痛みが伴うのではないか。

「ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していた(11:16)」。と言われても、根のある地上ではそう都合よく考えられまい。季節外れに雪でも降って頭が冴えたなら、天の故郷にふと懐かしさを感じずるくらいのことはあるでしょう。「春の雪めざめにちょうどよき狂い」、屈託した日々の裂け目から滲みでてくる郷愁か。

ところで、私たちキリスト者の「天の故郷」とはどんな感じなのでしょう。I氏の詩のようだったらいいのだからなあ、と思う。愛が充満する清らかさは、もちろん嬉しい。それと共に、赤提灯が並ぶ路地のような悲しみも、斑状にあったならば申し分ありません。

天の故郷が春の雪だけだったら、透明度が高すぎて堅苦しい。でも、ひと足に先に往ったI氏が、地上のような悲しみもあったぜ、とその詩で知らせてくれました。Ω